

第4章 鳥類

1. 鳥類調査

1-1. 目的

吉野川河口はラムサール条約における東アジア・オーストラリア地域シギ・チドリ保護区ネットワークに登録されており、鳥類の渡りの中継地として重要な地域となっている。

本業務は東環状大橋架橋計画に係る環境調査のうち、吉野川河口に生息する鳥類について調査を実施し、生息実態を把握するものである。

1-2. 調査期日

鳥類調査の総括表は、表 1-2-1のとおり。

現地調査は、シギ・チドリ類などの渡りに当たる春季・秋季に各2回実施、カモ類などについては晩秋期の11月(狩猟前)と越冬期(狩猟期間)の1月に各1回調査を実施した。なお、今年度の狩猟期間は11月15日から2月15日までである。

また、吉野川河口はチドリ類やコアジサシの繁殖地として知られている。そのため、これらの繁殖期に当たる6月にはチドリ類、コアジサシの繁殖状況について調査を実施した。

表 1-2-1 鳥類調査の総括

調査項目	調査時期及び期日		調査回数	調査体制
鳥類生息状況調査	春季	平成16年4月7、22日	6回	定点観察 (4地点)
	秋季	平成16年9月14、29日		
	冬季	平成16年11月10日 平成17年1月25日		
鳥類飛翔状況調査	春季	平成16年4月8、23日	4回	定点観察 (2地点)
	秋季	平成16年9月15日、10月1日		
コアジサシ繁殖状況調査	繁殖期	平成16年6月3、4日	1回	定点観察 任意踏査
鳥類の行動と工事状況の関係	春季	平成16年4月8、23日	2回	飛翔状況調査時に実施

1-3. 調査位置

調査位置および範囲は、吉野川河口の0.0k ~ 3.0k付近とし、調査定点を図1-3-1に示す。



図 1-3-1 鳥類調査位置

1-4. 調査結果

(1) 調査結果の概要

生息状況調査他、現地調査を通じて確認された鳥類は、9目24科75種であった。調査各回での出現状況は表 1-4-1のとおりであった。

表 1-4-1 鳥類確認状況(2004年4月～2005年1月)

調査実施日：平成16年4月7日～8日、4月22日～23日、6月3日～4日、9月14日～15日
 平成16年9月28日、10月1日、11月10日、平成17年1月25日
 調査方法：生息状況調査、飛翔状況調査、コアジサシ繁殖状況調査
 鳥類の行動状況と工事状況との関係(P3ピアの影響調査)
 調査会社名：三井共同建設コンサルタント(株)
 調査員氏名：山崎 崇、黒木利幸、中野 優、村上 広、(補助)中村利行

単位：個体

No.	目名	科名	種名	調査回							合計	重要種の選定基準			
				第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回		b	c	d	
1	カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ						2	2	4				
2			カンムリカイツブリ	1					33	2	36			準絶滅危惧 (NT)	
3	ペリカン	ウ	カウウ	511	288	2	283	421	8,248	8,026	17,779				
4	コウノトリ	サギ	ササゴイ				2				2				
5			アマサギ		5						5				
6			ダイサギ	53	83	1	52	63	10	3	265				
7			チュウサギ		1						1		準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	
8			コサギ	67	37	2	32	103	5	1	247				
9			カラシロサギ			1		17			18	情報不足 (DD)		絶滅危惧 類 (CR+EN)	
10			アオサギ	37	41	1	125	195	29	84	512				
11	カモ	カモ	マガモ	548	43			33	4,936	5,747	11,307				
12			カルガモ	684	288		21	564	1,583	1,453	4,593				
13			ゴガモ	336	377			99	299	820	1,931				
14			ヨシガモ						1	25	26				
15			オカヨシガモ						401	126	527				
16			ヒドリガモ	2,130	515			317	4,554	3,283	10,799				
17			アメリカヒドリ						1		1				
18			オナガガモ					65	38	128	231				
19			ハシビロガモ	30				2	48	10	90				
20			ホシハジロ						7		7				
21			スズガモ							7	7				
22			シロリガモ							2	2				
23			アメリカヒドリxヒドリガモ						1		1				
24	タカ	タカ	ミサゴ	9	12		46	47	129	40	283		準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧 類 (VU)	
25			ハチクマ					1			1		準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧 類 (CR+EN)	
26			トビ	81	34		116	91	126	158	606				
27		ハヤブサ	チュウヒ		16						1		絶滅危惧 類 (VU)	絶滅危惧 類 (VU)	
28			ハヤブサ				2	5	2		25	国内希少	絶滅危惧 類 (VU)	絶滅危惧 類 (VU)	
29			チョウゲンボウ					2			1	3			
30	チドリ	ミヤコドリ	ミヤコドリ						2		2			準絶滅危惧 (NT)	
31		チドリ	コチドリ		7						7				
32			シロチドリ	144	42	2	464	438	245	393	1,728			絶滅危惧 類 (VU)	
33			メダイチドリ	4	18		101	202			325				
34			ムナグロ					37			37				
35			ダイゼン	959	611	1	512	708	449	378	3,618				
36		シギ	キョウジョシギ		41			7			48				
37			トウネン		36		3	2	1		42				
38			ハマシギ	4,686	2,143		31	116	4,280	3,509	14,765				
39			オバシギ		9		10	1			20				
40			ミユビシギ	13	1		247	165			428				
41			アオアシシギ		15		32	1			48				
42			キアシシギ		10		24	18			52				
43			イソシギ	13	10		31	12	121	4	191				
44			ソリハシシギ				185	63			248				
45			オソリハシシギ	16	24		49	88			177				
46			チュウシャクシギ	12	341		27				380				
47		カモメ	ユリカモメ	230	6				4,534	1,242	6,012				
48			セグロカモメ	41	16		3	1	12	275	348				
49			オオセグロカモメ							64	64				
50			カモメ	67	1				2	49	119				
51			ウミネコ	26	3				43	2	74				
52			ズグロカモメ	1	2				14	9	26		絶滅危惧 類 (VU)	絶滅危惧 類 (CR+EN)	
53			コアジサシ		277						277		絶滅危惧 類 (VU)	絶滅危惧 類 (VU)	
54	ハト	ハト	キジバト	4	1				3	3	14				
55	ブッポウソウ	カワセミ	カワセミ						1		1				
56	スズメ	ヒバリ	ヒバリ	48	29	5	14	18	5	9	128				
57		ツバメ	ツバメ	59	40		8	4			111				
58		セキレイ	ハクセキレイ	5	2		5	5	20	21	58				
59			セグロセキレイ	3			3	2	13		21				
60			タヒバリ						1	4	5				
61		ヒヨドリ	ヒヨドリ	300	670			891	20		1,881				
62		モズ	モズ						1	2	3				
63		ツグミ	イソヒヨドリ				6		1		7				
64			ツグミ	13	4					3	10				
65		ウグイス	オオヨシキリ		11	18					29				
66			セッカ	12	26	2	10				51				
67		ホオジロ	ホオジロ	8	3	2	2	2	1	3	21				
68			カシノダカ	1							1				
69			オオジュリン						17	10	27				
70		アトリ	カワラヒワ	6	3	2			3	6	17				
71		ハタオリドリ	スズメ	5	13		47	24	9	13	111				
72		ムクドリ	ムクドリ	13	1					4	18				
73		カラス	ハシボソガラス	255	129	7	122	150	272	125	1,060				
74			ハシブトガラス	28	33		2	14	1	12	90				
75	ハト	ハト	カワラバト(トバト)	30			58	37	3	35	163				
9目24科75種				種数	41	46	13	34	43	48	44	75	1種	8種	11種
				個体数	11,489	6,315	46	2,675	5,035	30,533	26,098	82,191			

<鳥類の個体数の計数>

生息状況調査、飛翔状況調査については一時間ごとに個体数を計数しているため、同一個体が含まれる。従って実際の生息個体数よりも多く、延べ個体数を意味する。

<重要種の選定基準>

b：種の保存法における国内希少野生動物種

c：環境庁(2002)『改定・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 鳥類』掲載種

d：徳島県(2001)『徳島県の絶滅のおそれのある野生生物2001』

(2) 生息状況調査

春季調査(第1回調査,第2回調査)

春季調査として実施した第1回調査,第2回調査の結果は、表 1-4-2のとおりであった。確認種数は、飛翔状況調査時の確認種を含む。

第1回調査において41種の鳥類を確認した。冬鳥ではカンムリカイツブリ、ヒドリガモ、ハマシギ、ユリカモメ、ツグミ、カシラダカなどが残っており、カモ科やハマシギの個体数が多い。旅鳥ではオオソリハシシギ、チュウシャクシギなど、夏鳥ではツバメが出現している。留鳥ではダイサギ、ミサゴ、シロチドリ、キジバト、ヒバリ、セッカなどが出現している。また、渡り途中のヒヨドリの群れも出現している。

第2回調査において46種の鳥類を確認した。冬鳥ではマガモ、ヒドリガモ、ハマシギ、ユリカモメ、ツグミなどが残っているが、第1回調査と比較して、これらの個体数は少ない。旅鳥では第1回調査でも出現しているオオソリハシシギ、チュウシャクシギのほか、キョウジョシギ、トウネン、オバシギ、アオアシシギ、キアシシギが加わり、種数・個体数ともに増加傾向を示している。夏鳥ではツバメ、オオヨシキリが出現している。留鳥ではコサギ、カルガモ、ミサゴ、シロチドリ、ホオジロ、ハシボソガラスなどが出現している。また、渡り途中のヒヨドリの群れも出現している。

干潟における利用度の高い渉禽類(コウノトリ目:サギ科、チドリ目:チドリ科、シギ科)に着目すると、これらの個体数は干潮時を中心にその前後で変動する傾向が見られた。サギ科については、確認個体数そのものが少なく顕著な違いは見られないが、干潮時に各調査定点ともに減少する傾向がある。チドリ目については、同時時間帯にSt.1,2では減少し、St.4では増加する傾向が見られる。種数については、サギ科、チドリ目ともに少ないため、目立った変化は見られない。

干潮時を中心に前後1時間における鳥類の出現状況は以下のとおりであり、第1回調査では、マガモ、カルガモ、ヒドリガモはSt.3,4で多く出現しており、ダイゼン、ハマシギは分散して出現している。第2回調査では、コガモはSt.4で、カワウ、コアシサシはSt.1,2で多く出現している。ヒドリガモ、ダイゼン、ハマシギは分散して出現している。

表 1-4-2(1) 生息状況調査確認種(第1回調査)

調査実施日：平成16年4月7日～8日
 調査方法：生息状況調査、飛翔状況調査
 鳥類の行動状況と工事状況との関係（P3ピアの影響調査）
 調査会社名：三井共同建設コンサルタント㈱
 調査員氏名：山崎 崇、黒木利幸、中野 優、村上 広、(補助)中村利行

単位：個体

	目名	科名	種名	第1回						第1回 合計	重要種の選定基準		
				st.1	st.2	st.3	st.4	st.h1	st.h2		c	d	
1	カイツブリ	カイツブリ	カンムリカイツブリ	1						1		準絶滅危惧 (NT)	
2	ペリカン	ウ	カワウ	111	35	31	57	145	132	511			
3	コウノトリ	サギ	ダイサギ	4	10	8	9	7	15	53			
4			コサギ	21	10	22	6	3	5	67			
5			アオサギ	13	6	7	1	1	9	37			
6	カモ	カモ	マガモ		142	392	11	3		548			
7			カルガモ	7	3	484	163	11	16	684			
8			コガモ	4	139	11	182			336			
9			ヒドリガモ	870	136	399	586	61	78	2,130			
10			ハシビロガモ		30					30			
11	タカ	タカ	ミサゴ	7				2		9	準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧 類 (VU)	
12			トビ	20	7	7	5	28	14	81			
13	チドリ	チドリ	シロチドリ	64	27	49	3	1		144		絶滅危惧 類 (VU)	
14			メダイチドリ		4					4			
15			ダイゼン	470	395	35	51	8		959			
16		シギ	ハマシギ	2,465	882	426	816	97		4,686			
17			ミユビシギ	12		1				13			
18			イソシギ	2		3			8	13			
19			オオソリハシシギ	2	4	8	2			16			
20			チュウシャクシギ	7	5					12			
21		カモメ	ユリカモメ	6	18	33	99	33	41	230			
22			セグロカモメ			25	8		8	41			
23			カモメ		30		7	26	4	67			
24			ウミネコ	22			2		2	26			
25			スグロカモメ					1		1	絶滅危惧 類 (VU)	絶滅危惧 類 (CR+EN)	
26	ハト	ハト	キジバト	1		1		2		4			
27	スズメ	ヒバリ	ヒバリ	15	15	16	2			48			
28		ツバメ	ツバメ	9	19	7	4	10	10	59			
29		セキレイ	ハクセキレイ	2		2	1			5			
30			セグロセキレイ	2				1		3			
31		ヒヨドリ	ヒヨドリ	200	50	50				300			
32		ツグミ	ツグミ	1	2	2	3		5	13			
33		ウグイス	セッカ		3	3	6			12			
34		ホオジロ	ホオジロ			3	4		1	8			
35			カシラダカ			1				1			
36		アトリ	カワラヒワ		5	1				6			
37		ハタオリドリ	スズメ	2	3					5			
38		ムクドリ	ムクドリ	3			6	2	2	13			
39		カラス	ハシボソガラス	91	106	27	1	10	20	255			
40			ハシブトガラス	2	2	5	12		7	28			
41	ハト	ハト	カワラバト(ドバト)				30			30			
8目20科41種				種数	30	27	29	27	20	18	41	2種	4種
				個体数	4,436	2,088	2,059	2,077	452	377	11,489		

< 鳥類の個体数の計数 >

生息状況調査、飛翔状況調査については一時間ごとに個体数を計数しているため、同一個体が含まれる。従って実際の生息個体数よりも多く、延べ個体数を意味する。

< 重要種の選定基準 >

c：環境庁(2002)『改定・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 鳥類』掲載種
 d：徳島県(2001)『徳島県の絶滅のおそれのある野生生物2001』

表 1-4-2(2) 生息状況調査確認種 (第2回調査)

調査実施日：平成16年4月22日～23日
 調査方法：生息状況調査、飛翔状況調査
 鳥類の行動状況と工事状況との関係 (P3ピアの影響調査)
 調査会社名：三井共同建設コンサルタント(株)
 調査員氏名：山崎 崇、黒木利幸、中野 優、村上 広、(補助)中村利行

単位：個体

目名	科名	種名	第2回						第2回 合計	重要種の選定基準			
			st.1	st.2	st.3	st.4	st.h1	st.h2		b	c	d	
1	ペリカン	ウ	カウウ	66	92	40	13	24	53	288			
2	コウノトリ	サギ	アマサギ						5	5			
3			タイサギ	13	13	17	23	2	15	83			
4			チュウサギ					1	1	1	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	
5			コサギ	16	3	8	6	2	2	37			
6			アオサギ	6	14	10	4	3	4	41			
7	カモ	カモ	マガモ	7	1	33	2			43			
8			カルガモ	7	2	117	96	44	22	288			
9			コガモ	8	1		368			377			
10			ヒドリガモ	101	58	244	111		1	515			
11	タカ	タカ	ミサコ	7	4				1	12	準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧 類 (VU)	
12			トビ	9	3	7	4	7	4	34			
13		ハヤブサ	ハヤブサ	10	4	1		1		16	国内希少	絶滅危惧 類 (VU)	絶滅危惧 類 (VU)
14	チドリ	チドリ	コチドリ	1	2	4				7			
15			シロチドリ	20	10	10	2			42			絶滅危惧 類 (VU)
16			メダイチドリ	4	7	5	2			18			
17			タイゼン	161	341	51	55	1	2	611			
18		シギ	キョウジョシギ	22	19					41			
19			トウネン	32	1	3				36			
20			ハマシギ	333	1,495	153	132	23	7	2,143			
21			オバシギ	6	3					9			
22			ミユビシギ		1					1			
23			アオアシシギ	2		4	4	1	4	15			
24			キアシシギ	2			8			10			
25			イソシギ			3	1		6	10			
26			オソリハシシギ	7	5	8	3	1		24			
27			チュウシャクシギ	7	14	60	123	53	84	341			
28		カモメ	ユリカモメ	2	1		1	1	1	6			
29			セグロカモメ	4	3	6	2	1	1	16			
30			カモメ							1			
31			ウミネコ			3				3			
32			ズグロカモメ					2		2	絶滅危惧 類 (VU)	絶滅危惧 類 (CR+EN)	
33			コアジサシ	166	30	16	5	40	20	277	絶滅危惧 類 (VU)	絶滅危惧 類 (VU)	
34	ハト	ハト	キジバト			1				1			
35	スズメ	ヒバリ	ヒバリ	6	7	13	2	1		29			
36		ツバメ	ツバメ	11	6	10	2		11	40			
37		セキレイ	ハクセキレイ			2				2			
38		ヒヨドリ	ヒヨドリ	440	110	120				670			
39		ツグミ	ツグミ			3			1	4			
40		ウグイス	オオヨシキリ		3	7			1	11			
41			セッカ	6	1	9	10			26			
42		ホオジロ	ホオジロ				1		2	3			
43		ハタオリドリ	スズメ	11						2			13
44		ムクドリ	ムクドリ							1			1
45		カラス	ハシボソガラス	19	41	29	8	7	25	129			
46			ハシブトガラス	16	11	1		1	4	33			
7目19科46種			種数	33	32	32	26	20	25	46	1種	5種	6種
			個体数	1,528	2,306	998	988	216	279	6,315			

< 鳥類の個体数の計数 >

生息状況調査、飛翔状況調査については一時間ごとに個体数を計数しているため、同一個体が含まれる。従って実際の生息個体数よりも多く、延べ個体数を意味する。

< 重要種の選定基準 >

b: 種の保存法における国内希少野生動植物種

c: 環境庁(2002)『改定・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 鳥類』掲載種

d: 徳島県(2001)『徳島県の絶滅のおそれのある野生生物2001』

秋季調査(第4回調査,第5回調査)

秋季調査として実施した第4回調査,第5回調査の結果は、表 1-4-3のとおりであった。確認種数は、飛翔状況調査時の確認種を含む。

第4回調査において34種の鳥類を確認した。夏鳥ではササゴイ、ツバメが残っていたが、個体数は少ない。旅鳥ではトウネン、オバシギ、アオアシシギ、キアシシギ、ソリハシギ、オオソリハシギ、チュウシャクシギなどが出現している。冬鳥ではハマシギ、ハクセキレイなどが渡来している。留鳥ではダイサギ、トビ、シロチドリ、イソヒヨドリ、スズメなどが出現している。

第5回調査において43種の鳥類を確認した。夏鳥ではツバメが残っていたが、第4回調査と比較して、さらに個体数が少なくなっている。旅鳥ではメダイチドリ、ムナグロ、キョウジョシギ、トウネン、オバシギ、アオアシシギ、キアシシギ、ソリハシギ、オオソリハシギなどが出現している。冬鳥ではハマシギ、ハクセキレイのほか、マガモ、コガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモが加わり渡来している。留鳥ではコサギ、ミサゴ、シロチドリ、ヒバリ、ハシブトガラスなどが出現している。また、渡り途中のヒヨドリの群れも出現している。

干潟における利用度の高い渉禽類(コウノトリ目:サギ科、チドリ目:チドリ科、シギ科)に着目すると、その個体数は干潮時を中心にその前後で変動する傾向が見られる。サギ科については第4回調査では個体数が減少する傾向はほとんど見られず、第5回調査では干潮時にSt.1~3で個体数の減少する傾向が見られる。チドリ目については、同時間帯にSt.1,2では減少する傾向が見られる。個体数の変動については第4回調査では午前中に多く午後になく、第5回調査では午前、午後とも大きい。第4,5回調査ともにSt.1,2でチドリ目の種数が多い。

干潮時を中心に前後1時間における鳥類の出現状況は以下のとおりであった。第4回調査では、トビ、ミユビシギはSt.1で多く出現しており、シロチドリ、ダイゼンは分散して出現している。第5回調査では、カワウ、カルガモ、ヒドリガモはSt.2,3で、ミサゴ、トビ、ミユビシギはSt.1で、メダイチドリ、ハマシギはSt.1,2で出現している。シロチドリ、ダイゼンは分散して出現している。

表 1-4-3(1) 生息状況調査確認種(第4回調査)

調査実施日：平成16年9月14日～15日
 調査方法：生息状況調査、飛翔状況調査
 調査会社名：三井共同建設コンサルタント㈱
 調査員氏名：山崎 崇、黒木利幸、中野 優
 村上 広、(補助)中村利行

単位：個体

No.	目名	科名	種名	第4回						合計	重要種の選定基準			
				st.1	st.2	st.3	st.4	st.h1	st.h2		b	c	d	
1	バリカン	ウ	カウウ	48	76	19	29	40	71	283				
2	コウノトリ	サギ	ササゴイ		1	1				2				
3			タイサギ	4	11	10	13	6	8	52				
4			コサギ	12	5	8		4	3	32				
5			アオサギ	20	31	49	16	3	6	125				
6	カモ	カモ	カルガモ		2	12	7			21				
7	タカ	タカ	ミサゴ	21	9	6	3	4	3	46	準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧 類 (VU)		
8			トビ	44	13	12	5	16	26	116				
9		ハヤブサ	ハヤブサ					1	1	2	国内希少	絶滅危惧 類 (VU)	絶滅危惧 類 (VU)	
10	チドリ	チドリ	シロチドリ	309	105	44	4	2		464			絶滅危惧 類 (VU)	
11			メダイチドリ		79	22				101				
12			ダイセン	295	107	48	51	8	3	512				
13		シギ	トウネン		3					3				
14			ハマシギ	1	11	19				31				
15			オバシギ	1	6	3				10				
16			ミコヒシギ	215	18	2	12			247				
17			アオアシシギ	17	7	8				32				
18			キアシシギ	4	5	5	9		1	24				
19			イソシギ		3	6	6			16				
20			ソリハシシギ	11	37	80	31	10	16	185				
21			オオソリハシシギ	15	29	5				49				
22			チュウシャクシギ			5	5	1	16	27				
23		カモメ	セグロカモメ	1	1		1			3				
24	スズメ	ヒバリ	ヒバリ	1	4	8		1		14				
25		ツバメ	ツバメ		2				6	8				
26		セキレイ	ハクセキレイ		3	2				5				
27			セグロセキレイ		2	1				3				
28		ツグミ	イソヒヨドリ	4	2					6				
29		ウグイス	セッカ	4		1	3		2	10				
30		ホオジロ	ホオジロ							2				
31		ハタオリドリ	スズメ	41	1		3		2	47				
32		カラス	ハシボソガラス	41	37	16	6	16	6	122				
33			ハシブトガラス		1		1			2				
34	ハト	ハト	カワラバト(ドバト)			40				18				
6目16科34種				種数	21	29	26	19	13	17	34	1種	2種	3種
				個体数	1,109	611	432	207	112	204	2,675			

<鳥類の個体数の計数>

生息状況調査、飛翔状況調査については一時間ごとに個体数を計数しているため、同一個体が含まれる。従って実際の生息個体数よりも多く、延べ個体数を意味する。

<重要種の選定基準>

b: 種の保存法における国内希少野生動物種

c: 環境庁(2002)『改定・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 鳥類』掲載種

d: 徳島県(2001)『徳島県の絶滅のおそれのある野生生物2001』

表 1-4-3(2) 生息状況調査確認種(第5回調査)

調査実施日：平成16年9月28日、10月1日
 調査方法：生息状況調査、飛翔状況調査
 調査会社名：三井共同建設コンサルタント㈱
 調査員氏名：山崎 崇、黒木利幸、中野 優
 村上 広、(補助)中村利行

単位：個体

目名	科名	種名	第5回							任意	第5回 合計	重要種の選定基準		
			st.1	st.2	st.3	st.4	st.h1	st.h2	b			c	d	
1	ベリカン	ウ	カウ	8	115	167	27	40	64		421			
2	コウノトリ	サギ	ダイサギ	9	7	6	10	13	18		63			
3			コサギ	5	20	28	38	8	4		103			
4			カラシラサギ	3	4	4	4	2			17	情報不足 (DD)	絶滅危惧 類 (CR+EN)	
5			アオサギ	42	74	19	38	15	7		195			
6	カモ	カモ	マカモ		10	21	2				33			
7			カルガモ		101	289	86	88			564			
8			コガモ		34	65					99			
9			ヒドリガモ		98	107	111		1		317			
10			オナガガモ		4	59	2				65			
11			ハシビロガモ			2					2			
12	タカ	タカ	ミサコ	41	1		1	4			47	準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧 類 (VU)	
13			ハチクマ							1	1			
14			トビ	61	7	4	5	6	8		91			
15		ハヤブサ	ハヤブサ	2	2	1					5	国内希少	絶滅危惧 類 (VU)	絶滅危惧 類 (VU)
16			チョウゲンボウ					2			2			
17	チドリ	チドリ	シロチドリ	216	170	19	33				438			絶滅危惧 類 (VU)
18			メダイチドリ	84	117		1				202			
19			ムナグロ	18	19						37			
20			ダイゼン	205	296	44	143	20			708			
21		シギ	キョウジョシギ		7						7			
22			トウネン	2							2			
23			ハマシギ	29	58		29				116			
24			オバシギ		1						1			
25			ミユビシギ	94	15		56				165			
26			アオアシシギ		1						1			
27			キアシシギ		4	2	11	1			18			
28			イソシギ			1	1		10		12			
29			ソリハシシギ	14	20	15	10		4		63			
30			オオソリハシシギ	17	47	9	12	3			88			
31		カモメ	セグロカモメ						1		1			
32	ハト	ハト	キジバト					2	1		3			
33	ブッポウソウ	カウセミ	カウセミ						1		1			
34	スズメ	ヒバリ	ヒバリ	4	2	5	4	3			18			
35		ツバメ	ツバメ	2		2					4			
36		セキレイ	ハクセキレイ	3	1				1		5			
37			セグロセキレイ		1	1					2			
38		ヒヨドリ	ヒヨドリ	50	200	100	50	380	111		891			
39		ホオジロ	ホオジロ						2		2			
40		ハタオリドリ	スズメ	19			5				24			
41		カラス	ハシボソガラス	55	41	10	9	3	32		150			
42			ハシブトガラス	9	2		1		2		14			
43	ハト	ハト	カウラバト(ドバト)				29	8			37			
8目17科43種			種数	24	31	24	26	17	16	1	43	1種	3種	4種
			個体数	992	1,479	980	718	598	267	1	5,035			

<鳥類の個体数の計数>

生息状況調査、飛翔状況調査については一時間ごとに個体数を計数しているため、同一個体が含まれる。従って実際の生息個体数よりも多く、延べ個体数を意味する。

ハチクマは現地移動時(平成16年9月30日)に確認した個体であり、任意観察の結果として扱った。

<重要種の選定基準>

b: 種の保存法における国内希少野生動植物種

c: 環境庁(2002)『改定・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 鳥類』掲載種

d: 徳島県(2001)『徳島県の絶滅のおそれのある野生生物2001』

冬季調査(第6回調査,第7回調査)

冬季調査として実施した第6回調査,第7回調査の結果は、表 1-4-4のとおりであった。

第6回調査において48種の鳥類を確認した。旅鳥ではトウネンが少数出現している。冬鳥ではカンムリカイツブリ、マガモ、ヨシガモ、ホシハジロ、ハマシギ、カモメ、ズグロカモメ、タヒバリ、オオジュリンなどが渡来している。留鳥ではアオサギ、ミサゴ、シロチドリ、イソヒヨドリ、カワラヒワなどが出現している。

第7回調査において44種の鳥類を確認した。冬鳥ではカンムリカイツブリ、マガモ、オカヨシガモ、スズガモ、シリガモ、チュウビ、チョウゲンボウ、ハマシギ、ユリカモメ、オオセグロカモメ、ズグロカモメ、ハクセキレイ、タヒバリ、ツグミ、オオジュリンなどが出現している。留鳥ではカイツブリ、ダイサギ、カルガモ、トビ、シロチドリ、キジバト、モズ、セッカ、ホオジロなどが出現している。

干潟における利用度の高い渉禽類(コウノトリ目:サギ科、チドリ目:ミヤコドリ科、チドリ科、シギ科)に着目すると、その個体数は干潮時を中心にその前後で変動する傾向が見られる。サギ科については春季調査と同様に第6回調査では干潮時にSt.2を除いて個体数が減少する傾向が見られるが、第7回調査では干潮前に個体数が減少する傾向が見られる。チドリ目については、干潮時にSt.2では減少し、St.3,4で増加する傾向が見られる。第6回調査では12:30台にSt.2からSt.1へ群れの移動が観察され、個体数が入れ替わっている。第7回調査では干潮時にSt.2のチドリ目の個体数が減少し、その他の調査定点においても出現していない。種数については第6,7回調査ともにSt.1,2,3でチドリ目の種数が多い。

干潮時を中心に前後1時間における鳥類の出現状況は以下のとおりであった。第6回調査では、マガモ、オカヨシガモ、ヒドリガモはSt.1,2,3で多く出現しており、シロチドリ、ダイゼン、ハマシギはSt.2で多く出現している。また、ユリカモメはSt.2,3,4で多く出現している。第7回調査では、カウウはSt.1で、マガモはSt.1,2,3で、カルガモはSt.2,3で多く出現している。また、シロチドリ、ダイゼン、ハマシギ、ユリカモメはSt.2で多く出現している。ヒドリガモは分散して出現している。

表 1-4-4(1) 生息状況調査確認種(第6回調査)

調査実施日：平成16年11月10日
 調査方法：生息状況調査
 調査会社名：三井共同建設コンサルタント㈱
 調査員氏名：山崎 崇、黒木利幸、中野 優
 村上 広、(補助)中村利行

単位：個体

	目名	科名	種名	第6回				第6回 合計	貴重種の選定基準		
				st.1	st.2	st.3	st.4		b	c	d
1	カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ				2	2			
2			カンムリカイツブリ	14			19	33			準絶滅危惧 (NT)
3	ベリカン	ウ	カワウ	2,752	1,995	1,608	1,893	8,248			
4	コウノトリ	サギ	ダイサギ		1	4	5	10			
5			コサギ	1	1		3	5			
6			アオサギ	6	12	1	10	29			
7	カモ	カモ	マガモ	3,282	661	993		4,936			
8			カルガモ	15	266	1,261	41	1,583			
9			コガモ	29	120		150	299			
10			ヨシガモ				1	1			
11			オカヨシガモ	41	117	95	148	401			
12			ヒドリガモ	3,479	89	655	331	4,554			
13			アメリカヒドリ		1			1			
14			オナガガモ	31	3		4	38			
15			ハシビロガモ	19	29			48			
16			ホシハジロ		1	6		7			
17			アマガサドリ×ヒドリガモ		1			1			
18	タカ	タカ	ミサゴ	123	2	2	2	129		準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧 類 (VU)
19			トビ	106	11	6	3	126			
20		ハヤブサ	ハヤブサ			2		2	国内希少	絶滅危惧 類 (VU)	絶滅危惧 類 (VU)
21	チドリ	ミヤコドリ	ミヤコドリ	2				2			準絶滅危惧 (NT)
22		チドリ	シロチドリ	77	144	14	10	245			絶滅危惧 類 (VU)
23			ダイゼン	272	131	7	39	449			
24		シギ	トウネン			1		1			
25			ハマシギ	1,546	2,449	87	198	4,280			
26			イソシギ			119	2	121			
27		カモメ	ユリカモメ	205	2,819	866	644	4,534			
28			セグロカモメ	3	4	5		12			
29			カモメ	1	1			2			
30			ウミネコ		42		1	43			
31			スグロカモメ		2	5	7	14		絶滅危惧 類 (VU)	絶滅危惧 類 (CR+EN)
32	ハト	ハト	キジバト	3				3			
33	スズメ	ヒバリ	ヒバリ		5			5			
34		セキレイ	ハクセキレイ		5	11	4	20			
35			セグロセキレイ	4	9			13			
36			タヒバリ			1		1			
37		ヒヨドリ	ヒヨドリ				20	20			
38		モズ	モズ			1		1			
39		ツグミ	イソヒヨドリ		1			1			
40			ツグミ			2	1	3			
41		ホオジロ	ホオジロ			1		1			
42			オオジュリン		7		10	17			
43		アトリ	カワラヒワ			3		3			
44		ハタオリドリ	スズメ	7			2	9			
45		ムクドリ	ムクドリ	1			3	4			
46		カラス	ハシボソガラス	130	131	10	1	272			
47			ハシブトガラス			1		1			
48	ハト	ハト	カワラバト(ドバト)				3	3			
8目21科48種			種数	25	30	27	29	48	1種	3種	6種
			個体数	12,149	9,060	5,767	3,557	30,533			

<鳥類の個体数の計数>

生息状況調査については一時間ごとに個体数を計数しているため、同一個体が含まれる。従って実際の生息個体数よりも多く、延べ個体数を意味する。

<重要種の選定基準>

- b: 種の保存法における国内希少野生動物種
- c: 環境庁(2002)『改定・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 鳥類』掲載種
- d: 徳島県(2001)『徳島県の絶滅のおそれのある野生生物2001』

表 1-4-4(2) 生息状況調査確認種(第7回調査)

調査実施日：平成17年1月25日
 調査方法：生息状況調査
 調査会社名：三井共同建設コンサルタント(株)
 調査員氏名：山崎 崇、黒木利幸、中野 優
 村上 広、(補助)中村利行

単位：個体

	目名	科名	種名	第7回				第7回 合計	貴重種の選定基準	
				st.1	st.2	st.3	st.4		c	d
1	カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ	1		1		2		
2			カンムリカイツブリ	1			1			準絶滅危惧 (NT)
3	ペリカン	ウ	カワウ	7,389	2	3	632	8,026		
4	コウノトリ	サギ	ダイサギ			1	2	3		
5			コサギ		1			1		
6			アオサギ	55	14	11	4	84		
7	カモ	カモ	マガモ	2,176	2,032	1,485	54	5,747		
8			カルガモ	9	283	868	293	1,453		
9			コガモ	92	418	31	279	820		
10			ヨシガモ	16	8	1		25		
11			オカヨシガモ	97	29			126		
12			ヒドリガモ	2,116	219	531	417	3,283		
13			オナガガモ	60	55	13		128		
14			ハシビロガモ	10				10		
15			スズガモ	7				7		
16			シノリガモ	2				2		
17	タカ	タカ	ミサゴ	34	1	1	4	40	準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧 類 (VU)
18			トビ	119	12	11	16	158		
19			チュウヒ				1	1	絶滅危惧 類 (VU)	絶滅危惧 類 (VU)
20		ハヤブサ	チョウゲンボウ			1		1		
21	チドリ	チドリ	シロチドリ	21	270	91	11	393		絶滅危惧 類 (VU)
22			ダイゼン	9	344	22	3	378		
23		シギ	ハマシギ	18	3,433	22	36	3,509		
24			イソシギ			2	2	4		
25		カモメ	コリカモメ	4	1,075	55	108	1,242		
26			セグロカモメ	100	166	5	4	275		
27			オオセグロカモメ		64			64		
28			カモメ	1	41		7	49		
29			ウミネコ		1		1	2		
30			スグロカモメ	1		1	7	9	絶滅危惧 類 (VU)	絶滅危惧 類 (CR+EN)
31	ハト	ハト	キジバト	1		1	1	3		
32	スズメ	ヒバリ	ヒバリ		5		4	9		
33		セキレイ	ハクセキレイ	4	6	11		21		
34			タヒバリ		2	2		4		
35		モズ	モズ			2		2		
36		ツグミ	ツグミ	1	1	1	7	10		
37		ウグイス	セッカ				1	1		
38		ホオジロ	ホオジロ			3		3		
39			オオジュリン				10	10		
40		アトリ	カウラヒウ			6		6		
41		ハタオリドリ	スズメ	7			6	13		
42		カラス	ハシボソガラス	48	57	10	10	125		
43			ハシブトガラス	11		1		12		
44	ハト	ハト	カウラハト(ドハト)				35	35		
8目19科44種			種数	29	25	29	28	44	3種	5種
			個体数	12,410	8,539	3,193	1,956	26,098		

<鳥類の個体数の計数>

生息状況調査については一時間ごとに個体数を計数しているため、同一個体が含まれる。従って実際の生息個体数よりも多く、延べ個体数を意味する。

<重要種の選定基準>

c：環境庁(2002)『改定・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 鳥類』掲載種

d：徳島県(2001)『徳島県の絶滅のおそれのある野生生物2001』

鳥類の経年出現状況

ア. 経年出現状況

過年度調査との比較については、表 1-4-5の文献を用いた。過年度調査における鳥類の種名については、種名を統一して整理するため一部種名の記載を変更した。

過年度における調査では、調査範囲、調査方法、調査時期などが異なり、調査時期によって出現あるいは優占する種が異なるため、単純に比較することは難しい。

今年度調査と平成15年度調査では類似した調査が行われている。今年度の春季調査では第1回調査が41種、第2回調査が46種であり、平成15年度調査の春季調査では46種が記録されている。また、今年度の秋季調査では第4回調査が34種、第5回調査が43種であり、平成15年度調査の秋季調査では45種が記録されている。これらのことから、平成15年度調査の春季調査、秋季調査と今年度における春季調査、秋季調査を比較した場合、種数の変動は少ないものと言することができる。その一方で、個体数では平成15年度の方が多く、平成16年度は少ない。平成16年度調査では春季調査時にカモ科の個体数が多いもののチドリ目の個体数は少なかった。また、秋季調査時ではチドリ目の個体数が少なく、スズメ目などのその他の種の個体数が多くなっている。

平成16年度の冬季調査については第6回調査が48種、第7回調査が44種であるが、平成15年度調査では26種しか記録されていない。これはカイツブリ目、カモ目、スズメ目などの種数が増加したことに起因し、カイツブリ、モズ、セッカなどの留鳥やカンムリカイツブリ、スズガモ、シロガモ、タヒバリ、ツグミなどの冬鳥が出現しているためである。個体数については大きな変化は見られず、今年度、過年度ともにカワウ、カモ科、カモメ科などが多く出現している。

表 1-4-5 過年度調査における調査方法・調査時期・確認種数一覧

	報告書名	調査方法	調査時期	確認種数
1	徳島県(1994)『末広有料延伸道路(仮称)環境影響予測調査報告書』	生息状況調査 ・ラインセンサス法	平成5年7月22日 平成5年9月21日 平成5年12月2日	8目20科54種
		生息状況調査 ・任意観察調査	平成5年7月22日 平成5年9月20日 平成5年12月2日	
2	徳島県都市道路整備局・パシフィックコンサルタンツ(株)(1997)『平成8年度 県単街路事業調査委託 徳島東環状線 徳島市住吉 第23分割 環境調査業務報告書』	生息状況調査 ・定位記録法	平成8年10月9日 平成9年1月22日 平成9年5月7日	8目21科55種
		生息状況調査 ・ラインセンサス法	平成8年10月9日	
3	徳島県都市道路整備局・パシフィックコンサルタンツ(株)(1999)『平成10年度 街路事業県単街路事業合併調査委託 報告書』	生息状況調査 ・定位記録法	平成10年10月25日 平成11年1月30日 平成11年5月6日	7目21科62種
4	徳島県県土整備部都市道路整備局・(株)パスコ(2003)『平成14年度 緊急地方道路整備工事(調査委託)徳島東環状線 徳島市東吉野町2丁目(第10分割) 報告書』	飛翔状況調査 ・定位記録法	平成15年1月18日	7目14科27種
5	三洋テクノマリン(2004)『平成15年度 緊急地方道路整備工事(調査委託)徳島東環状線 徳島市東吉野町2丁目～北沖洲4丁目(第11分割) 報告書』	生息状況調査 ・定位記録法	平成15年5月15日 平成15年9月26日 平成15年1月20日	7目17科63種
		飛翔状況調査 ・定位記録法	平成15年5月15,16日 平成15年9月24,25日	
		コアジサシ調査 ・定位記録法 ・任意観察調査	平成15年6月5,6日	

:確認種数については外来種、不明種(…sp.)を含め、分類体系に日本鳥学会(2000)『日本産鳥類目録改訂第6版 2000』を用いたため、報告書本文の確認科数、種数とは異なる。

イ. 生息状況調査結果の比較

平成15年度と平成16年度で調査条件が類似した調査について、季節毎に出現状況を整理したものは表 1-4-7のとおりである。なお、観測時の条件が平成15年度は、干潮時を含む3時間での確認数であり、平成16年度は1時間毎の観測値の干潮時を含む3時間帯であり、個体数計数については重複を含む延べ個体数となる。

春季は、St.1～St.4の各地点とも、平成15年度調査より16年度調査での確認種類数が多い。この理由としては、平成16年度の調査時期が4月であったことからカモ類など冬鳥が相当数残留していたためと考えられる。

秋季、冬季についてもSt.1～St.4の各地点とも、平成15年度調査より16年度調査での確認種類数が多い。

定点観察での確認状況から、工事施工中を含む平成15年度から16年度において、鳥類の飛来状況のうち種類数について減少は認められない。

表 1-4-7(1) 生息状況調査・確認状況の比較(春季)

調査位置 種名/調査期日	St.1			St.2			St.3			St.4			地区全体		
	H15.5.15	H16.4.7	H16.4.22	H15.5.15	H16.4.7	H16.4.22	H15.5.15	H16.4.7	H16.4.22	H15.5.15	H16.4.7	H16.4.22	H15.5.15	H16.4.7	H16.4.22
カンムリカイツブリ															
カウ		3	7	29	3	18	1	4			6	3	30	15	28
ヨシゴイ							1						1		
ダイサギ			1	1	1	1		1	5	1	1	3	2	3	10
コサギ		2	1		2	1		2			1			6	2
アオサギ		1				1		1	1		1	1		3	3
マガモ			1		13	1		35	4					48	6
カルガモ			1			2	3	47	4		19	12	3	66	19
コガモ					17			3			12	33		31	33
ヒドリガモ		4	13		5	9		40	20		60	20		108	62
ハシビロガモ					5									5	
ミサゴ	1	1	1			1	1						2	1	2
トビ		1	1		1			1	2		1			4	3
ハヤブサ															
コチドリ							1		2				1		2
シロチドリ		12	2	4	5	2	4	3	1		1	1	8	21	6
メダイチドリ			1			1	2		2	2		2	4		6
ダイゼン	4	29	7	5	34	23	30	5	6	19	11	9	58	79	45
キョウジョシギ			5			4				3			3		9
トウネン			6						1						7
ウズラシギ				1									1		
ハマシギ		82	16	65	38	125	186	106	12	135	213	40	386	439	193
サルハマシギ															
オバシギ															
ミコビシギ						1		1						1	1
アオアシシギ	1											2	1		2
キアシシギ	1			4			8			8		2	21		2
イソシギ															
ソリハシシギ				1			3			7			11		
オオソリハシシギ			1	1		1	3			2	1	1	6	1	3
ダイシャクシギ															
ホウロクシギ															
チュウシャクシギ	2	1	2	13	1	2	9		1	16		7	40	2	12
ユリカモメ		3			2			1			6	1		12	1
セグロカモメ								2	1		1			3	1
カモメ					1									1	
ウミネコ		1												1	
ズグロカモメ															
アジサシ															
コアジサシ			19			20	15		3				15		42
キジバト															
ヒバリ		1	1		1	1	1	2	1				1	4	3
ツバメ		1	1		1	3	3	1					3	3	4
ハクセキレイ															
セグロセキレイ															
ヒヨドリ															
ツグミ					1			1	1					2	1
オオヨシキリ							2		2	6			8		2
セッカ			1				3		1		1	1	3	1	3
ホオジロ								1				1		1	1
カシラダカ															
カワラヒワ															
スズメ		2	2											2	2
ムクドリ															
ハシボソガラス		4	3	1	2	3		1	2				1	7	8
ハシトガラス			2								2			2	2
カワラバト(ドバト)															
種類数	5	16	23	11	18	20	18	20	20	10	16	17	23	29	34
個体数	9	147	95	125	130	220	276	258	72	199	337	138	609	872	525

平成15年度調査の個体数は、最干潮時を含む前後3時間での観察数である。

平成16年度調査の個体数は、3時間(3回分)計数の平均値である。

地区全体の個体数が空白のものは、平成16年度調査において、干潮時前後3時間以外での確認種であるものを示す。

表 1-4-7(2) 生息状況調査・確認状況の比較(秋季)

調査位置 種名 / 調査期日	St.1			St.2			St.3			St.4			地区全体		
	H15.9.26	H16.9.14	H16.9.28	H15.9.26	H16.9.14	H16.9.28	H15.9.26	H16.9.14	H16.9.28	H15.9.26	H16.9.14	H16.9.28	H15.9.26	H16.9.14	H16.9.28
カワウ	2	2		68	1	17	1		20		1	2	71	4	39
ササゴイ					1			1						2	
ダイサギ		1	1	1	2	1	2	1	1	2	1	1	5	5	4
コサギ		3		1		2	3	2	2	1		5	5	5	9
カラシラサギ									1			1			2
アオサギ		2	1	15	3	6	2	5	2	4	4	5	21	13	14
マガモ						4			3						7
カルガモ	4					24	23		29			14	27		66
コガモ									10						10
ヒドリガモ						34			19						53
オナガガモ						4	2		15			1	2		20
ハシビロガモ									1						1
ミサゴ		2	5		2						1			5	5
トビ	1	7	8		2	1	1	3	1		1	1	2	13	11
ハヤブサ			2			1									3
チョウゲンボウ															
シロチドリ	4	24	37	2	14	10		5	6		1	12	6	44	64
メダイチドリ			17	29	12	15		2				1	29	14	33
オオメダイチドリ				2										2	
ムナグロ			6												6
ダイゼン		27	23	20	10	15	2	6	7	50	10	40	72	53	85
キョウジョシギ						1									1
トウネン			1	2	1								2	1	1
ハマシギ			7	26	2	6		4				11	26	6	24
オバシギ					1			1						2	
ミユビシギ		32	18	32								17	32	32	35
アオアシシギ		3		3				1					3	4	
クサシギ										1			1		
キアシシギ		1		2		1		1	1		1	2	2	3	4
イソシギ								1			2			3	
ソリハシシギ		1	2	5	2	2	9	5	2		2	1	14	10	7
オオソリハシシギ		2	4		3	3		1	2	3		6	3	6	14
ホウロクシギ															
チュウシャクシギ										1	2		1	2	
セグロカモメ															
ヒバリ					1	1		1	1					2	2
ツバメ			2		2									2	2
ハクセキレイ					1									1	
セグロセキレイ					1	1		1						2	1
イソヒヨドリ		1	50		1	200			100			50		2	400
セッカ		2						1			1			4	
ホオジロ															
スズメ		10	5											10	5
ハシボソガラス		5	4		2	5	2	3	1		1	1	2	10	12
ハシブトガラス			1		1									1	1
カワラバト(ドバト)															
種数	4	17	19	14	21	22	10	19	20	7	13	18	21	29	32
個体数	11	124	194	208	65	353	47	45	221	62	28	170	328	261	939

平成15年度調査の個体数は、最干潮時を含む前後3時間での観察数である。

平成16年度調査の個体数は、3時間(3回分)計数の平均値である。

地区全体の個体数が空白のものは、平成16年度調査において、干潮時前後3時間以外での確認種であることを示す。

表 1-4-7(3) 生息状況調査・確認状況の比較(冬季)

調査位置 種名/調査期日	St.1			St.2			St.3			St.4			地区全体		
	H16.1.20	H16.11.10	H17.1.25	H16.1.20	H16.11.10	H17.1.25	H16.1.20	H16.11.10	H17.1.25	H16.1.20	H16.11.10	H17.1.25	H16.1.20	H16.11.10	H17.1.25
カイツブリ			1												1
カンムリカイツブリ		1	1							5				6	1
カワウ	9	21	914	316	3	1	151	1	1	2	2	476	27	917	
ダイサギ								1		1				2	
コサギ		1		1	1					1			1	3	
アオサギ		1	6	2	2	3	4		2		2	6	3	13	
マガモ	594	425	221	154	50	246	35	112	182	15		798	587	649	
カルガモ	14	2	3	2	24	45	41	126	85	28	10	9	85	161	142
コガモ	20	5	6	29	15	51			2		38	54	49	58	114
ヨシガモ			4												4
オカヨシガモ	18	5	18		19	5		9			5		18	38	24
ヒドリガモ	124	769	293	5	12	19	68	100	87	90	12	20	287	893	418
アメリカヒドリ					1										1
オナガガモ	1	5	11						2				1	5	13
ハシビロガモ		4	2		6									10	2
スズガモ			1												1
シナリガモ			1												1
ホシハジロ					1			1							2
アメリカヒドリ×ヒドリガモ															
ミサゴ	1	15	4		1			1	1		1	1	1	18	6
トビ		15	18	4	1	2		2	1		1	3	4	19	24
チュウビ															
ハヤブサ								1							1
チョウゲンボウ															
ミヤコドリ															
シロチドリ	1	7	2	3	31	33	2	2	9	3	2	6	9	42	50
ダイゼン	24	3	2	24	16	31	5	2	3	4	10	1	57	30	37
トウネン															
ハマシギ	8	18	13	377	355	245		24	15	95	62	18	480	459	291
イソシギ								119	1		1			120	1
ダイシャクシギ										2			2		
コリカモメ			1	88	450	52		453	2	8	140	14	96	1043	69
セグロカモメ		1	14	37	1	32			2				37	2	48
オオセグロカモメ						9									9
カモメ				1		5				1		1	2		6
ウミネコ				3									3		
ズグロカモメ				6				1		2	1	1	8	2	1
キジバト												1			1
ヒバリ					1	2								1	2
ハクセキレイ			1		1	1		4	1					5	3
セグロセキレイ		2			2									4	
タヒバリ						1			1						2
ヒヨドリ											20			20	
モズ									1						1
イソヒヨドリ					1										1
ツグミ						1		1						1	1
セッカ															
ホオジロ															
オオジュリン										6		2	6		2
カワラヒワ								3	1					3	1
スズメ											2			2	
ムクドリ											3			3	
ハシボソガラス	4	20	6	4	14	9		2	2	1	1	1	9	37	18
ハシブトガラス			1					1	1					1	2
カワラバト(ドバト)											3			3	
種数	12	19	24	17	23	20	7	21	21	12	21	16	22	36	35
個体数	818	1321	1545	1056	1008	794	306	963	402	255	321	135	2435	3612	2875

平成15年度調査の個体数は、最干潮時を含む前後3時間での観察数である。

平成16年度調査の個体数は、3時間(3回分)計数の平均値である。

地区全体の個体数が空白のものは、平成16年度調査において、干潮時前後3時間以外での確認種であるものを示す。

(3) 飛翔状況調査

東環状大橋予定個所及び吉野川大橋における確認種は、表 1-4-8のとおり。グループ区分ごとの飛翔高度別個体数は表 1-4-9のとおりであった。

飛翔状況調査の結果、45種の鳥類が確認された。

St.h1の東環状大橋予定箇所では35種1,378個体を確認し、個体数の多い種としてヒヨドリ380個体、カワウ249個体、カルガモ143個体、ハマシギ120個体などがあげられる。干潟間を往来するダイサギ、コサギなどのサギ科やダイゼン、ハマシギ、チュウシャクシギなどのチドリ目を確認した。

St.h2の吉野川大橋ではSt.h1と比較して個体数はやや少なく、36種1,127個体を確認した。個体数の多い種としてカワウ320個体、ヒヨドリ111個体、チュウシャクシギ100個体などがあげられる。個体数は少ないが、ツグミ、オオヨシキリ、ホオジロなどのスズメ目の種数も多い。

表 1-4-8 鳥類のグループ区分および該当する種

グループ区分	種名
カワウ	カワウ
サギ科	アマサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ カラシラサギ、アオサギ
カモ科	マガモ、カルガモ、ヒドリガモ
タカ目	ミサゴ、トビ、ハヤブサ、チョウゲンボウ
チドリ科・シギ科	シロチドリ、ダイゼン、ハマシギ、アオアシシギ キアシシギ、イソシギ、ソリハシシギ オオソリハシシギ、チュウシャクシギ
カモメ科	ユリカモメ、セグロカモメ、カモメ、ウミネコ ズグロカモメ、コアジサシ
その他 ハト科・カワセミ科・スズメ目	キジバト、カワセミ、ヒバリ、ツバメ ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ ツグミ、オオヨシキリ、セッカ、ホオジロ スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス ハシブトガラス、カワラバト(ドバト)

表 1-4-9(1) 鳥類のグループ・飛翔高度別出現状況 (St.h1:東環状大橋予定箇所)

グループ名	橋：通過せず				a：0-10m				a,b間		a,c間	b：10-15m				c：15-20m				d：20m以上				合計				
	4/8	4/23	9/15	10/1	4/8	4/23	9/15	10/1	4/8	10/1	9/15	4/8	4/23	9/15	10/1	4/8	4/23	9/15	10/1	4/8	4/23	9/15	10/1		4/8	4/23	9/15	10/1
1 カワウ	5	3	6	21	17	5	9	11				9	1	3	4	8	9	1	1	106	6	21	3					249
2 サギ科	1	2	6	11	7	2	6	27				2	1			1					3	1						70
3 カモ科	6	7		15	39	14		73	3			11	5			12	2			4	16							207
4 タカ目	1		3	3	2	1	4	2		1	1	2		1	2	7				18	7	12	4					71
5 チドリ科・シギ科		26	4	4	104	29	17	20					1			2					23							230
6 カモメ科	3	2			30	42						5				7				15								104
7 その他(ハト科、カワセミ科、スズメ目)	1	3	15	311	10		2	1				8	2		82	4				2	4		2					447
個体数	17	43	34	365	209	93	38	134	3	1	1	37	10	4	88	41	11	1	1	145	59	34	9					1,378
	459				474				4	1	139				54				247									

表 1-4-9(2) 鳥類のグループ・飛翔高度別出現状況 (St.h2:吉野川大橋)

グループ名	橋：通過せず				A：橋の下				B：橋の上10mまで				B,C間	C：橋の上10m以上				合計
	4/8	4/23	9/15	10/1	4/8	4/23	9/15	10/1	4/8	4/23	9/15	10/1	4/8	4/8	4/23	9/15	10/1	
1 カワウ	4	13	14	32	2	1			13	2	15	7		113	37	42	25	320
2 サギ科	12	16	13	26	9		2		6	2		3		2	8	2		101
3 カモ科	91	13		1					3	2				8				118
4 タカ目	13	3	20	6					1	1	4			1	6	2		57
5 チドリ科・シギ科	5	97	38	14	3					1	5			5	9			177
6 カモメ科	6	19			4	1			34	1			2	9	1		1	78
7 その他(ハト科、カワセミ科、スズメ目)	37	44	31	149	4		2		2	1	1			2	2		1	276
個体数	168	205	116	228	22	2	4	0	59	10	25	10	2	126	62	59	29	1,127
	717				28				104				2	276				

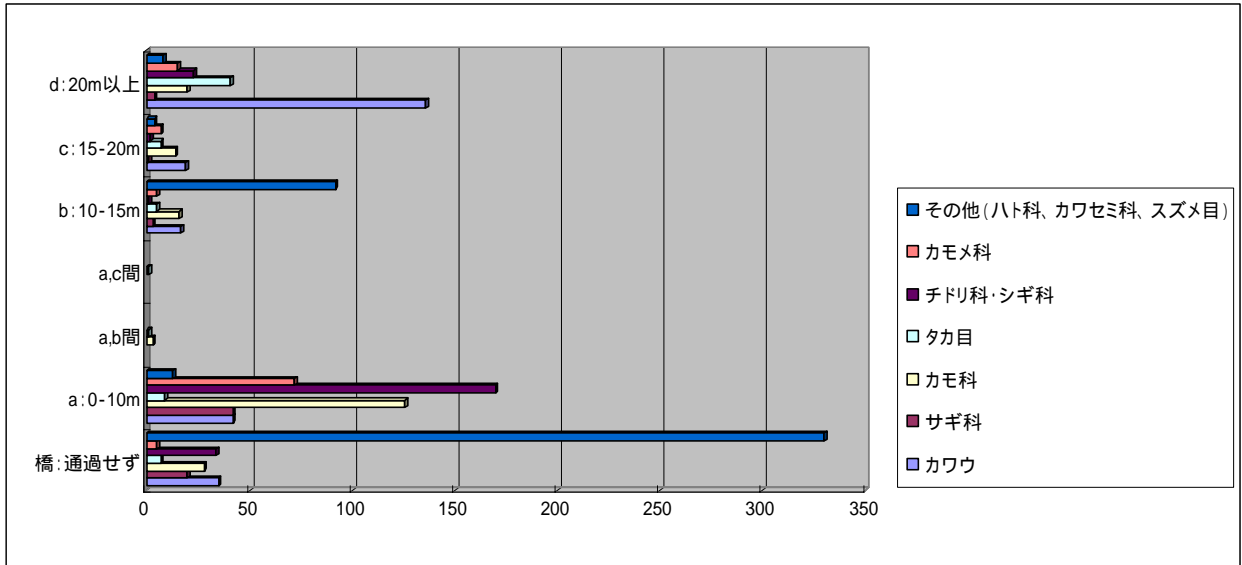


図 1-4-1(1) 鳥類のグループ・飛翔高度別出現状況 (St.h1: 東環状大橋予定箇所)

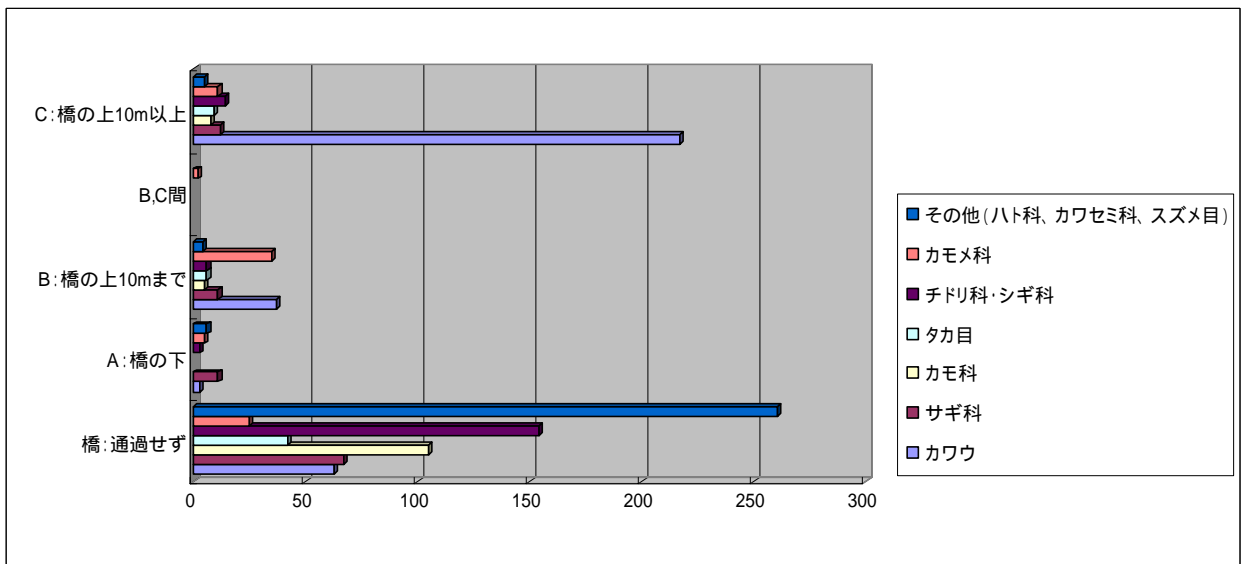


図 1-4-1(2) 鳥類のグループ・飛翔高度別出現状況 (St.h2: 吉野川大橋)

チドリ科・シギ科

シギ・チドリ類の時間帯・飛翔高度別個体数は表 1-4-10のとおりであった。

ア. 東環状大橋予定箇所

St.h1(東環状大橋予定箇所)周辺において表48に示す230個体を確認した。飛翔高度別には、a(0-10m)が170個体、b(10-15m)が1個体、c(15-20m)が2個体、d(20m以上)23個体であり、東環状大橋予定箇所を通過しなかった個体は34個体である。干潮時にはシロチドリ、ダイゼン、ハマシギなどが低空を飛翔しながら移動し、干潟で探餌する行動が見られた。シロチドリはaの高度を1回、ダイゼンはaの高度を6回、cの高度を1回、ハマシギはaの高度を12回、cの高度を1回、ソリハシギはaの高度を3回、チュウシヤクシギはaの高度を2回、dの高度を2回飛翔している。

表 1-4-10(1) 時間帯・飛翔高度帯別個体数(St.h1:東環状大橋予定箇所)

調査方法:飛翔状況調査
調査会社名:三井共同建設コンサルタント(株)
調査員氏名:山崎 崇、黒木 利幸

単位:個体

時間帯	橋:通過せず				a:0~10m				b:10~15m				c:15~20m				d:20m以上				計
	4/8	4/23	9/15	10/1	4/8	4/23	9/15	10/1	4/8	4/23	9/15	10/1	4/8	4/23	9/15	10/1	4/8	4/23	9/15	10/1	
6:00		2					3														5
7:00																					0
8:00				1															17		18
9:00																					0
10:00				3				3													6
11:00		1				15	1														17
12:00		4	2		45	5															56
13:00		1			59																60
14:00			2				1						2								5
15:00						1	20														21
16:00						5	3			1									6		15
17:00		18					9														27
小計	0	26	4	4	104	29	17	20	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	23	0	230
合計		34				170				1				2					23		

注) 定位記録法により、各時間帯に出現した鳥類の個体を記録した。

1時間当たりの鳥類の個体数は可能な限り重複しないように計数したが、各調査定点間を移動した個体も含むため、実際の個体数よりも多く、延べ確認個体数を意味する。

イ. 吉野川大橋

St.h2(吉野川大橋)周辺においては表49に示す177個体を確認した。飛翔高度別には、A(橋の下)が3個体、B(橋の上10mまで)が6個体、C(橋の上10m以上)が14個体、吉野川大橋を通過しなかった個体が154個体である。イソシギ、ソリハシシギ、キアシシギはBの高度を各1回、チュウシャクシギはCの高度を3回飛翔している。干潮時に吉野川大橋の下流域に出現する干潟で採餌する個体が多く、橋を通過する個体は少ない。

表 1-4-10(2) 時間帯・飛翔高度帯別個体数(St.h2:吉野川大橋)

調査方法:飛翔状況調査
調査会社名:三井共同建設コンサルタント(株)
調査員氏名:山崎 崇、黒木 利幸

単位:個体

時間帯	橋:通過せず				A:橋の下				B:橋の上10mまで				C:橋の上10m以上				計
	4/8	4/23	9/15	10/1	4/8	4/23	9/15	10/1	4/8	4/23	9/15	10/1	4/8	4/23	9/15	10/1	
6:00		2															2
7:00			3		3												6
8:00	2	17	3														22
9:00		40	6	2													48
10:00		8	6	4										3			21
11:00		5	3	3										2			13
12:00		8	1	1					1								11
13:00		5	9	2													16
14:00		3	1	1							4				7		16
15:00			2							1					1		4
16:00	1	2		1											1		5
17:00	2	7	4														13
小計	5	97	38	14	3	0	0	0	0	1	5	0	0	5	9	0	177
合計		154				3				6				14			

注) 定位記録法により、各時間帯に出現した鳥類の個体を記録した。
1時間当たりの鳥類の個体数は可能な限り重複しないように計数したが、各調査定点間を移動した個体も含むため、実際の個体数よりも多く、延べ確認個体数を意味する。

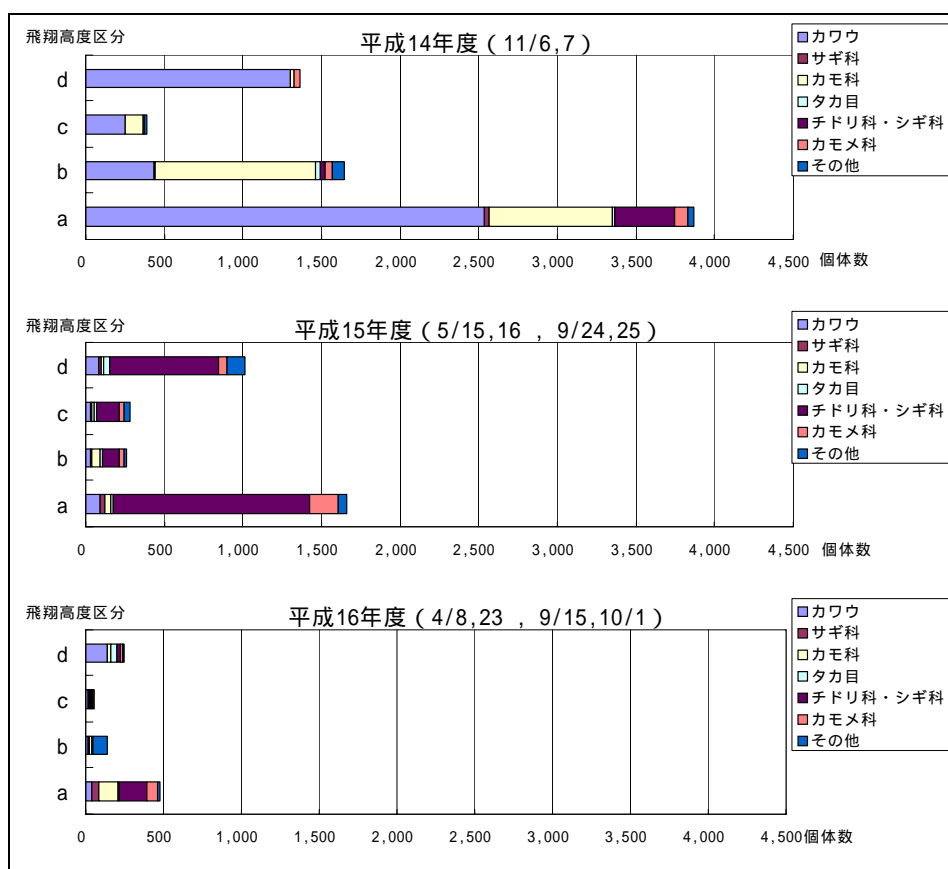
過年度調査との比較

ア. 東環状大橋予定箇所

St.h1の東環状大橋予定箇所における飛翔状況について過年度との比較を行い、表 1-4-11および図 1-4-2に示した。冬季に個体数が増加するカワウ、カモ科については、平成14年度に多く出現しており、カワウはaの高度で、カモ科はbの高度で最も個体数が多くなっている。平成15年度ではチドリ科・シギ科がaの高度で多く出現しているが、平成16年度では移動する群れが少なかったため、個体数も少なくなっている。鳥類のグループを問わず、aの低空を飛翔する個体が多いため、St.h1周辺の干潟環境などに深く依存して生活しているものといえる。

表 1-4-11 東環状大橋予定箇所における鳥類の飛翔状況(平成14年度～平成16年度調査)

グループ区分	平成14年度 (11/6,7)				平成15年度 (5/15,16, 9/24,25)				平成16年度 (4/8,23, 9/15,10/1)			
	a 0～10m	b 10～15m	c 15～20m	d 20m以上	a 0～10m	b 10～15m	c 15～20m	d 20m以上	a 0～10m	b 10～15m	c 15～20m	d 20m以上
カワウ	2534	434	248	1300	90	32	28	81	42	17	19	136
サギ科	35	5		1	32	9	7	18	42	3	1	4
カモ科	779	1020	117	22	41	52	22	18	126	16	14	20
タカ目	15	30	6	1	14	15	15	38	9	5	7	41
チドリ科・シギ科	380	33			1244	104	142	690	170	1	2	23
カモメ科	84	43	1	36	185	35	28	52	72	5	7	15
その他	42	80	18		57	15	37	116	13	92	4	8



注) 飛翔高度a:0-10m,b:10-15m,c:15-20m,d:20m以上
 個体数については可能な限り重複しないように計数したが、各調査定点間を移動した個体も含まれるため、実際の個体数よりも多く、延べ個体数を意味する。

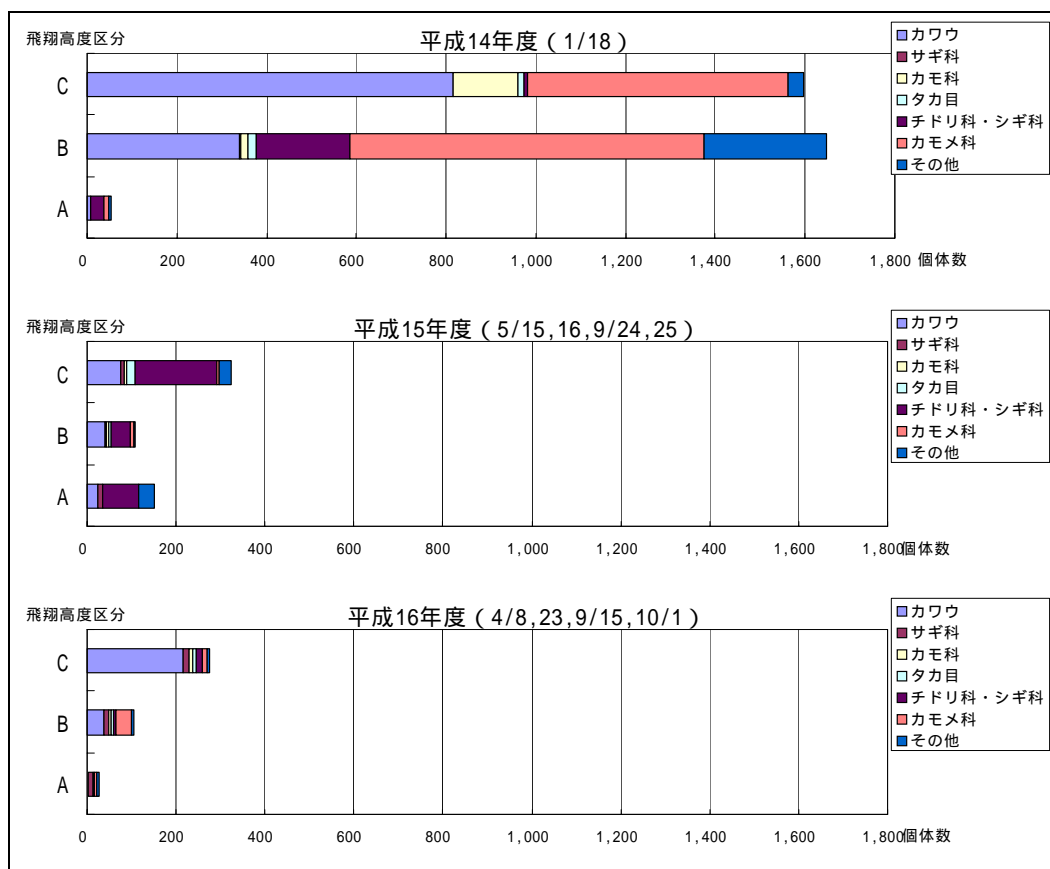
図 1-4-2 東環状大橋予定箇所における鳥類の飛翔状況(平成14年度～平成16年度調査)

イ. 吉野川大橋

St.h2の吉野川大橋における飛翔状況について過年度との比較を行い、表 1-4-12 および図 1-4-3に示した。冬季に個体数が増加するカワウ、カモ科については、St.h1と同様に平成14年度に多く出現している。各年度においてCの高度で多く出現している。平成15年度ではチドリ科・シギ科がCの高度で多く出現しているが、平成16年度では移動する群れが少なかったため、個体数も少なくなっている。鳥類のグループを問わず、B,Cの高空を飛翔する個体が多いため、St.h2周辺の環境にあまり依存しておらず、主に移動のために出現しているといえる。

表 1-4-12 吉野川大橋における鳥類の飛翔状況(平成14年度～平成16年度調査)

グループ区分	平成14年度 (1/18)			平成15年度 (5/15,16, 9/24,25)			平成16年度 (4/8,23, 9/15,10/1)		
	A 橋の下	B 橋の上10mまで	C 橋の上10m以上	A 橋の下	B 橋の上10mまで	C 橋の上10m以上	A 橋の下	B 橋の上10mまで	C 橋の上10m以上
カワウ	7	339	815	23	41	75	3	37	217
サギ科		3		11	2	9	11	11	12
カモ科		16	144	1	6	5		5	8
タカ目		19	15		6	19		6	9
チドリ科・シギ科	30	209	8	82	43	183	3	6	14
カモメ科	10	790	581		8	7	5	35	11
その他	7	272	35	33	3	26	6	4	5



注) 飛翔高度 A:橋の下, B:橋の上10mまで, C:橋の上10m以上
個体数については可能な限り重複しないように計数したが、各調査定点間を移動した個体も含まれるため、実際の個体数よりも多く、延べ個体数を意味する。

図 1-4-3 吉野川大橋における鳥類の飛翔状況(平成14年度～平成16年度調査)

(4) コアジサシ繁殖状況調査

6月にコアジサシの繁殖状況について調査を実施したが、本種の集団繁殖地および成鳥は未確認であり、4月(第2回調査)に約20~30個体を確認したのみである(写真1参照)。コアジサシと同様に主に砂地で繁殖を行うシロチドリについては、成鳥を確認したものの、繁殖は未確認である。

6月調査において河口干潟に残っている砂地は、満潮時に潮の影響を受ける地域が大半であり、以前、コアジサシ、チドリ類が営巣していたやや標高の高い場所(小さな丘状になった場所)には、イネ科草本が繁茂し、その他、海浜植物、クスノキ、キミガヨランなども生育していた(写真2参照)。そのため、コアジサシやチドリ類などの繁殖できる砂地は消滅していた。

また、中州の広い範囲に生ごみなどが打ち上げられて散在しており、その生ゴミ周辺にハシボソガラスやハシブトガラスの群れが見られ、干潟に生育する低木ではハシボソガラスが繁殖(1巣確認)していた。ほかにはアナジャコ漁の漁船の干潟への接岸やバイクの乗り入れ(写真3参照)などがあげられ、人が砂州内部に入ることが多く、コアジサシの集団繁殖地としての条件は悪化している。

その一方で、砂地の草原化にともない草原環境に生息するヒバリ多く見られ、繁殖に関する行動として囀りやテリトリー争いを確認した。

繁殖を確認した鳥類として、前述のハシボソガラスのほかオオヨシキリ(1巣確認)があげられる。これらの営巣地の状況は表1-4-13のとおりであった。

オオヨシキリは草丈2.3mのツルヨシで孵化直後の雛を5個体確認し、ハシボソガラスは樹高2.5mのクスノキで巣立ち間近の幼鳥を2個体確認した。オオヨシキリについては、河口に群生するヨシ原で、盛んに囀っていた。しかしながら、ヨシの草丈は約1mと低く生育密度も疎らで、オオヨシキリの営巣時期としてはやや早く、営巣地は未確認である。ヨシ原の約5箇所でおオオヨシキリが囀っていたが、雌個体は、未確認である。

なお、他府県におけるコアジサシの最近の記録については以下に示した。

- 兵庫県西宮市甲子園浜(確認時期:2001.6.9)500個体以上が飛来、繁殖(神戸新聞ホームページより)
- 兵庫県明石市大蔵海岸(確認時期:2004.5.26)200個体が営巣(神戸新聞ホームページより)
- 兵庫県神戸港沖 神戸空港島(確認時期不明)営巣を確認(神戸新聞ホームページより)
- 大阪府関西国際空港二期島(確認時期:2004.4中旬以降)約1500個体が飛来、約550個の卵を確認(読売新聞ホームページより)
- 大阪府南港野鳥園周辺(確認時期:毎年)北港に多数飛来、未公表((財)大阪港開発技術協会 総務部施設課 南港野鳥園長 木村 茂氏 聞き取り)



撮影年月日：平成16年4月23日
調査方法：飛翔状況調査
(定位記録法St.h1)
調査会社名：三井共同建設コンサルタント㈱
調査者氏名：山崎 崇、黒木利幸

写真 1 コアジサシの成鳥



撮影年月日：平成16年6月3日
調査方法：コアジサシ繁殖状況調査(任意踏査)
調査会社名：三井共同建設コンサルタント㈱
調査者氏名：山崎 崇、黒木利幸

写真 2 以前にコアジサシが営巣していた中州(平成16年6月3日)



撮影年月日：平成16年4月22日
調査方法：生息状況調査(定位記録法St.2)
調査会社名：三井共同建設コンサルタント㈱
調査者氏名：山崎 崇、黒木利幸

撮影年月日：平成16年6月4日
調査方法：コアジサシ繁殖状況調査(任意踏査)
調査会社名：三井共同建設コンサルタント㈱
調査者氏名：山崎 崇、黒木利幸

写真 3 干潟への人為干渉(左：アナジャコ漁、右：バイクの乗り入れ)

表 1-4-13 その他鳥類の繁殖状況一覧

調査実施日：平成16年6月3,4日

調査方法：コアジサシ繁殖状況調査（任意踏査）

調査会社名：三井共同建設コンサルタント㈱

調査者氏名：山崎 崇、黒木利幸

種名(巣の数)	確認状況	
<p>オオヨシキリ (1巣)</p>	<p>営巣草本：ツルヨシ 草丈：2.3m 営巣場所の高さ：1.3m 営巣場所：2本のツルヨシの茎を利用 巣材：枯草、荷作り紐 プラスチックウール 巣の外径：約11cm 巣の内径：約6cm 巣の厚さ(外側)：約10cm 巣内状況：孵化直後の雛(5個体) 親鳥：雌雄(各1個体)</p>	
<p>ハシボソガラス (1巣)</p>	<p>営巣木：クスノキ 樹高：2.5m 営巣場所の高さ：2.5m 営巣場所の高さ：1.1m 営巣場所：クスノキの幹付近の横枝を利用 巣材：木の枝、草の茎(人工物なし) 巣の外径：約50cm 巣の内径：約26cm 巣の厚さ(外側)：約20cm 巣内状況：巣立ち間近の幼鳥(2個体) 親鳥：雌雄(各1個体)</p>	

(5) 鳥類の行動と工事状況との関係 (P2ピアの影響調査)

工事による渡り鳥への影響については、4月の飛翔状況調査時に併せて実施した。4月8日の調査では影響が見られなかったため、補足的に23日にも調査を実施した。

P2ピア工事やその他の人為干渉と観察された鳥類の回避状況は表 1-4-14のとおりであった。

ピア設置の騒音、振動による鳥類の逃避は見られなかったが、作業船舶の往来により生じる波が水際に到達したときに、水際で採餌や休息をしているカルガモ4個体、ダイゼン1個体、ハマシギ2個体、チュウシャクシギ10個体が飛去する行動を確認した。

表 1-4-14(1) P2ピア付近の人為干渉状況(1)

調査実施日：平成16年4月8日
 調査方法：鳥類の行動状況と工事状況との関係 (P2ピア影響調査)
 (飛翔状況調査時に定位記録法により実施)
 調査会社名：三井共同建設コンサルタント(株)
 調査者氏名：山崎 崇、黒木利幸

時間	人為干渉の内容	鳥類への影響	鳥類への影響要因
1	7:13 P2ピア周辺 作業船舶1隻通過	-	-
2	7:31 P2ピア周辺 作業船舶4隻通過	-	-
3	7:45 P2ピア周辺 作業船舶1隻通過	-	-
4	7:49 P2ピア周辺 作業船舶1隻通過	-	-
5	7:55 P2ピア周辺 作業船舶1隻通過	-	-
6	8:01 P2ピア作業 クレーン稼働	-	-
7	8:25 P2ピア周辺 作業船舶1隻通過	-	-
8	9:00 P2ピア作業 クレーン稼働音約1分間	-	-
9	P2ピア作業 クレーンを動かす	-	-
10	9:03 P2ピア周辺 作業船舶1隻通過	-	-
11	9:07 P2ピア作業 クレーン稼働音約1分間	-	-
12	9:08 P2ピア作業 クレーン稼働音約1分間	-	-
13	9:37 P2ピア周辺 作業船舶1隻通過	-	-
14	10:02 P2ピア作業 クレーン、ハンマーで叩くような音	-	-
15	10:22 P2ピア作業 クレーン稼働音数分間	-	-
16	10:44 P2ピア作業 クレーン稼働音数分間	-	-
17	11:12 P2ピア周辺 作業船舶1隻通過	-	-
18	11:23 P2ピア周辺 ジェットスキー1台通過	-	-
19	11:25 P2ピア周辺 漁船1隻通過	-	-
20	P2ピア作業 クレーン、ハンマーで叩くような音	-	-
21	11:50 住吉干潟 大人1名、犬1頭入る	-	-
22	12:00 河口干潟 (P2ピア北側) 漁師が入る	河口干潟 (P2ピア北西側) に 休止中のズグロカモメが漁師 に警戒し、その後飛び去る	漁師が休止中のズグロカモメ に接近したため
23	12:25 P2ピア周辺 作業船舶1隻通過	-	-
24	12:27 P2ピア周辺 作業船舶1隻通過	-	-
25	14:13 P2ピア周辺 作業船舶1隻通過	-	-
26	14:15 P2ピア周辺 ジェットスキー1台通過	-	-
27	14:20 P2ピア周辺 ジェットスキー1台通過	-	-
28	14:25 P2ピア周辺 漁船1隻通過	-	-
29	15:15 P2ピア周辺 漁船1隻通過	-	-
30	15:20 P2ピア作業 クレーン、ハンマーで叩くような音	-	-
31	15:30 住吉干潟 子供3名入る	-	-
32	15:42 住吉干潟 子供2名爆竹を鳴らす	-	-
33	15:59 P2ピア周辺 漁船1隻通過	-	-
34	16:26 P2ピア周辺 漁船1隻通過	-	-
35	16:56 P2ピア周辺 漁船1隻通過	-	-
36	P2ピア周辺 作業船舶2隻通過	-	-
37	17:40 P7ピア周辺 ハンマーで叩くような 大きい音	-	-

表 1-4-14(2) P2ピア付近の人為干渉状況(2)

調査実施日：平成16年4月23日
 調査方法：鳥類の行動状況と工事状況との関係（P2ピア影響調査）
 （飛翔状況調査時に定位記録法により実施）
 調査会社名：三井共同建設コンサルタント㈱
 調査者氏名：山崎 崇、黒木利幸

	時間	人為干渉の内容	鳥類への影響	鳥類への影響要因
1	7:08	P2ピア周辺 作業船舶2隻通過	-	-
2	7:16	P2ピア周辺 作業船舶1隻通過	河口干潟（P2ピア東側）のカルガモ4個体が飛び去る	作業船舶の通過時に生じた航走波および加速中の作業船舶による
3	7:28	P2ピア周辺 作業船舶1隻通過	-	-
4	7:30～12:00	P2ピア作業 クレーン稼働	-	-
5	8:41	P2ピア周辺 作業船舶1隻通過	-	-
6	11:16	P2ピア周辺 作業船舶1隻通過	-	-
7	11:46	P2ピア周辺 作業船舶1隻通過	-	-
8	13:25	P2ピア周辺 作業船舶1隻通過	-	-
9	14:10～15:00	住吉干潟 小学校児童約70名観察回	-	-
10	16:02	P2ピア周辺 漁船1隻通過	-	-
11	16:16	P2ピア周辺 作業船舶2隻通過	-	-
12	16:29	P2ピア周辺 漁船1隻通過	-	-
13	17:01	P2ピア周辺 作業船舶1隻通過	住吉干潟のダイゼン1個体、ハマシギ2個体、チュウシャクシギ10個体が飛び去る	作業船舶の通過時に生じた航走波、作業船舶の接近および船内の人影による
14	17:05	P2ピア周辺 漁船1隻通過	-	-
15	17:00～17:20	住吉干潟 親子3名入る	-	-

注) 赤字箇所 工事による鳥類への影響

(6) 特筆すべき鳥類

現地調査で確認された鳥類のうち、特筆すべき鳥類として貴重種選定基準に該当する種は表 1-4-15のとおり、カイツブリ目1種、コウノトリ目2種、タカ目4種、チドリ目4種の合計4目7科11種であった。

表 1-4-15 特筆すべき鳥類

目名	科名	種名	選定基準	延べ確認個体数	
				H16年度	H15年度
カイツブリ	カイツブリ	カンムリカイツブリ	d)準絶滅危惧:NT	36個体	-
コウノトリ	サギ	チュウサギ	c)準絶滅危惧:NT d)準絶滅危惧:NT	1個体	-
		カラシラサギ	c)情報不足:DD d)絶滅危惧 類:CR+EN	18個体	-
タカ	タカ	ミサゴ	c)準絶滅危惧:NT d)絶滅危惧 類:VU	283個体	4個体
		ハチクマ	c)準絶滅危惧:NT d)絶滅危惧 類:CR+EN	1個体	-
		チュウヒ	c)絶滅危惧 類:VU d)絶滅危惧 類:VU	1個体	-
	ハヤブサ	ハヤブサ	b)国内希少野生動植物種 c)絶滅危惧 類:VU d)絶滅危惧 類:VU	25個体	1個体
チドリ	ミヤコドリ	ミヤコドリ	d)準絶滅危惧:NT	2個体	-
	チドリ	シロチドリ	d)絶滅危惧 類:VU	1,728個体	23個体
		オオメダイチドリ	d)準絶滅危惧:NT	-	2個体
	シギ	カラフトアオアシシギ	b)国内希少野生動植物種 c)絶滅危惧 A類:CR d)絶滅危惧 類:VU	-	1個体
		ダイシャクシギ	d)準絶滅危惧:NT	-	5個体
		ハウロクシギ	c)準絶滅危惧:NT d)準絶滅危惧:NT	-	3個体
	カモメ	ズグロカモメ	c)絶滅危惧 類:VU d)絶滅危惧 類:CR+EN	26個体	9個体
		コアジサシ	c)絶滅危惧 類:VU d)絶滅危惧 類:VU	277個体	15個体

延べ確認個体数は各調査時期、各調査地点、1時間当たりの個体数を合計したものであるため、実際の個体数よりも多いと考えられる。

【貴重種選定基準】

- a) 天然記念物
- b) 種の保存法における国内希少野生動植物種
- c) 環境庁(2002)『改定・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 鳥類』
- d) 徳島県(2001)『徳島県の絶滅のおそれのある野生生物2001』
- e) フラッグまたは標識付きのシギ・チドリ類などの鳥類

特筆すべき鳥類の確認状況は以下のとおりであった。

- カンムリカイツブリ

4月の第1回調査時、11月の第6回調査時、1月の第7回調査時に遊泳や探餌を行う数個体を確認した。

- チュウサギ

4月の第2回調査時に飛翔中の1個体を確認した。

- カラシラサギ

6月の第3回調査時に1個体、9、10月の第5回調査時に2個体を河口干潟などで確認した。

- ミサゴ

6月の第3回調査時を除く各調査時期に河口域の広範囲で確認した。11月の第6回調査時にはのり養殖の杭に19個体が休止していた。

- ハチクマ

9月の第5回調査時の調査時間外に、強風のなか低空を吉野川の北から南へ横断する1個体を確認した。

- チュウビ

1月の第7回調査時にヨシ原上空で1個体を確認した。

- ハヤブサ

4月の第1回調査、6月の第3回調査、1月の第7回調査を除く各調査時期に飛翔する数個体を確認した。

- ミヤコドリ

11月の第6回調査時に河口干潟で1個体を確認した。

- シロチドリ

各調査時期に河口の干潟部で普通に見られ、数十個体が探餌などをしていた。

- ズグロカモメ

4月の第1,2回調査時、11月の第6回調査時、1月の第7回調査時に干潟部などで1,2個体を確認した。

- コアジサシ

4月の第2回調査時に飛翔しながら探餌する個体など20～30個体を確認した。

上記の他、保全等の対象種にはなっておらず、特筆すべき鳥類にあげていないが、吉野川河口域で確認記録の少ない鳥類の確認状況を以下に示した。

- シノリガモ

1月の第7回調査時に遊泳中の雌1個体を確認した。徳島県では確認記録が少なく、渡来状況については不明である。

- カワセミ

10月の第5回調査時に飛翔中の1個体を確認した。

- ヒドリガモ × アメリカヒドリ(雑種)

11月の第6回調査時に1個体が出現している。この雑種個体は頭部や頬がレモン色で目の周囲が緑色であり、アメリカヒドリの特徴もあるが、頭部のところどころに赤褐色を帯び、ヒドリガモの特徴もある。